

『通訳者と戦後日米外交』

著者：鳥飼玖美子

出版社：みすず書房

出版年：2007年

頁数：408（目次＋本文＋参考文献）

ISBN：978-4-622-07309-3

評者：古家 聡（武蔵野大学）



評者は、かつて研究社から発行されていた『時事英語研究』の編集長時代に、「これが通訳だ」という特集を組み、その巻頭にこんなことを書いている。「通訳はつらい仕事である。他人のコミュニケーションのために、大胆な判断をしたり、細やかな配慮をしたりしなければならない。スピードとの闘いでもある。旺盛な知識欲と異文化に対する好奇心、そしてすぐれた集中力と語学力、これらすべてが、通訳には要求される。できてあたり前、失敗すると責められる。その重責の割には、社会的地位も待遇もまだまだ低い。国際化社会の経済、学術、文化などの分野における交流や発展への通訳の貢献度が、その卓越した技量とともに、もっと評価されてもよいのではないだろうか」（1987年2月号）。20年以上も前に書いたこの文言が現在の通訳の世界にも当てはまるかどうか定かではないが、今回、本書を読了して真っ先に思い浮かんだのは、「社会的に大きな意義を持つ通訳者の存在は、やはりもっと評価されるべきだ」ということであった。

本書は、著者の鳥飼玖美子氏が英国の University of Southampton に提出した英文の博士論文を日本の読者向けに日本語で書き改めたものである。内容は、戦後日本における同時通訳のパイオニアとも言うべき西山千、相馬雪香、村松増美、國弘正雄、小松達也の5氏に対して行ったインタビューをもとに、通訳者の役割とは何かを探る通訳論となっている。博士論文というからには、そこに何らかの方法論が求められるのであり、著者は、オーラル・ヒストリーという比較的新しい研究方法を採用している。オーラル・ヒストリーとは、文字通り、調査対象者が語った個人の歴史を学問的に分析する手法のことである。口頭による翻訳行為である「通訳」を論じるにはまさにうってつけの方法と言えるだろう。ただし、この方法に対する批判もある。それは著者自身も詳述しているように、信頼性と妥当性の観点からの批判である。この信頼性と妥当性という表現は、様々な学問分野で聞かれ、それぞれの分野によって意味するところが多少違う。社会心理学

などでは「実証的に証明できるか」という意味で使われることが多いが、オーラル・ヒストリーに関して信頼性と妥当性と言った場合には、この手法が「果たして真実を伝えているのか」という意味である。著者はそれに対しては、Plummer (2001) の主張などを援用しながら、妥当性の阻害要因を意識した上で、本研究を社会学的ライフヒストリーとして位置づけ、調査者自身が通訳者であることから生じる利点（例えば、ライフストーリー・インタビューには欠かせないラポールが存在する）も述べ、周到に準備したことを強調している。

評者には、このオーラル・ヒストリーという手法を用いたことは、通訳論を展開するには効果的だったと思われる。なぜなら、戦後の代表的な通訳者自身が語る体験やその姿勢はやはり説得力があり、それらをうまく整理することによって通訳者のポジショニングを明らかにできるからである。同時に、この手法を取ったことにより、もう1つの効果も生まれている。それは、本書自体が2重のストーリーとしても読めるということである。つまり、國弘氏のややべらんめー調で語っている内容を物語として楽しむことができるだけでなく、著者の提起した「通訳者の役割とは」という質問に対する答えを読み解こうとして物語の最後まで進むことができるという、ある種の「謎解き」の要素にもなっているのである。

「オリジナル発言者になりきっての通訳なのか、聞く側に立ち、聞きやすさを第1義に考える通訳なのか。あくまで中立を守り、透明な存在としての通訳者に徹するのか。異文化の橋渡しを任務と心得て、場合によっては積極的に介入し文化の仲介者としての役割を果たすのか」(p.71)と、通訳者の役割について問うている著者は、5人が語る通訳者の役割をどう分析してどのような答えを導き出すのか。まだ観ていない映画の結末を語るような愚をおかさないように、ここでは鳥飼氏の結論にはあえてふれないでおくが、常に先を読みたくなるような構成になっていることは指摘しておきたい。

本書は、本文だけで382ページ、それに17ページの参考文献がついているほどの大著である。随所に多くの示唆に富んだ著者の意見が述べられている中で、英語教育と異文化コミュニケーションに関連する記述を取り上げてみる。

まず、日本の英語教育において、いっこうに成果が上がらないことについて、「英語は国際語であるから必要であると考え、話せたらよい、と多くの日本人が思っているようであるが、どの程度、本気で話したいのかは不明である。日常的に英語が不可欠な社会でないのだから切実な思いにはならないと言えるし、そのような状況にあることは考えてみれば幸せなことなのである」(p.68)としている。そして、「英語を話す、話さないという次元以前に、異なった文化に対する柔軟な感性が不可欠となろう」(同ページ)と述べている。

評者は常々、大学における英語教育と会話学校等の各種学校における英語教育とは何が違うのか、それを教授者たちがきちんと意識し自分なりの解答を持って

いるべきだと主張している。評者自身の1つの解答として、スキル教育がその土台にあるにしても、大学生を対象にした英語教育においては、皆が皆、英語を必要としているわけではないので、日本語とは違う英語という外国語を学ぶことによって、思考が柔軟になるという側面を強調すべきではないかと考えている。その意味で、著者の言う「異なった文化に対する柔軟な感性」を培っていくことこそが、スキル教育が中心の会話学校等に対する大学のような公的機関における英語教育としての存在意義になるのではないかと思う。もちろん、いかなる外国語教育においても、その基盤にはスキル教育が欠かせないわけで、著者は、これからの英語教育の現場で、通訳の訓練法である「シャドーイング」や未知語の推測力、さらには予見能力などを英語教育に応用することも提唱している（p.69）。

次に、異文化コミュニケーションに関連することとして、文化をどのように捉えるかについても、著者の洞察力を感じさせる分析を読むことができる。実は、「文化をどのようにして学んだか」「通訳をしている際に、どのように文化的差異に対応したか」という質問に対して、5名の通訳の達人たちからは、明快な答えが出なかったという。むしろ、文化については「学んだ記憶がない」「気にしたことはない」「文化の違いで通訳に困ったことはない」と、予想外に素っ気ない答えが返ってきた（p.335）。このことに対して、著者は、「文化」の定義が曖昧だった可能性を指摘し、さまざまに定義される「文化」の概念を紹介する。そして、M. Bennettの提示した6段階の異文化感性発達モデルとそれを翻訳者・通訳者の信条にあてはめて考察したKatan（2004）にのっとり、5人がどの段階に属していたかの判断は難しいとしながらも、「統合」という最終段階に属していたのではないかと解釈している。つまり、本人たちが「文化的通訳者」という概念を意識しないまでも、あるいは反発したとしても、現実には、ひとつ以上の文化的視点から状況を分析し、評価する能力を持っていたのであり、「言語と文化をダイアログとして捉え」「通訳における文化を言語から切り離すことなく、コミュニケーションの相互行為」として理解していた可能性がある（pp.340-341）、としている。

さらに異文化能力や異文化リテラシーという概念をKramschやByramの理論をもとに説明したあと、「5名とも、好奇心に満ち、異文化を受け入れるオープンな態度がある。（中略）異質な文化を新たに学び、現実のコミュニケーションやインターアクションという制約の中で、獲得した知識、スキルや態度を機能させる術を心得ており、自文化と他文化を批判的に評価する能力を有している」（pp.348-349）と述べている。このことは、英語などの外国語を使ってコミュニケーションを図り、異文化対応を行っているすべての人々が目指すべき目標なのではないだろうか。社会的に大きな意義を持つ通訳者のこうした姿勢がもっと評価されれば、適切な異文化対応が欠かせない多文化社会になりつつある日本において、取るべき態度のお手本として認知されていくことになると思う。

最後に、本書は異文化接触を橋渡しするコミュニケーションの専門家である通訳者のパイオニアが自ら語った重要な記録としても、他に類をみない貴重な資料の役割を果たしているということにもふれておきたい。著者がインタビューによって解明しようとしたのは、次の3点である。戦後日本の外交に関わった通訳者は、どのような人々であったのか。異なる言語と文化を架橋するにあたり、どのような苦労があったか。通訳者の役割をどのように認識していたのか。これらを探るにあたって、著者は実際のインタビューでは自由に語ってもらうことを優先し、その結果、「脱線」に思えるような語りや、実は思わぬ指摘や重要な問題も含んでいた (p.24) という。このような、まさに「歴史の一部」となる通訳の達人たちの生きた言葉から、われわれが学ぶことは大である。その意味からも、本書は後世に残る画期的な通訳論として、通訳関係者だけではなく、英語教育関係者も含めて、仕事で外国語を使ってコミュニケーションを図っている人にもぜひ読んでもらいたいと願っている。

評者：古家 聡 (FURUYA Satoru) 武蔵野大学教授。異文化コミュニケーション学修士。専門は、英語教育、異文化コミュニケーション。大学英語教育学会、異文化コミュニケーション学会、日本国際文化学会などの会員。著書に『<日本人英語>はこうして身につける』(明日香出版)、論文に「翻訳の等価性からみたバック・トランスレーションの批判的考察」(『異文化コミュニケーション論集』第4号) など。

連絡先：satoru_f@musashino-u.ac.jp
